

# 「私生活尊重権」を憲法で保障する意味 フランス 憲法理論における民法理論の受容と発展

著者	佐藤 雄一郎
号	11
学位授与番号	75
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/42276">http://hdl.handle.net/10097/42276</a>

さとう ゆういちろう  
佐藤 雄一郎(北海道)

学位の種類 博士(法学)  
学位記番号 博第75号  
学位授与年月日 平成20年3月25日  
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当  
研究科・専攻 東北大学大学院法学研究科(博士後期3年の課程)  
総合法制専攻  
学位論文題目 「私生活尊重権」を憲法で保障する意味  
—フランス憲法理論における民法理論の受容と発展—  
論文審査委員 (主査)  
教授 山元 一 教授 辻村 みよ子

## 論文内容の要旨

(1) 本論文の目的は、フランスの「私生活尊重権(droit au respect de la vie privé)」を素材として、フランスにおける憲法と民法、そしてヨーロッパ人権条約との関係性を明らかにする作業を通じて、個人の私生活に関する権利を憲法によって保障する意味を探ることである。フランスの「私生活尊重権」の観念は、アメリカや日本で確立された「プライバシー権」とは異なる点が多いため、本論文は、フランスの「私生活尊重権」の特徴や内容を、憲法院判例やヨーロッパ人権裁判所の判例、憲法学・民法学の学説を通じて明らかにしている。さらに、これまでは憲法学と民法学で別個に検討されてきたのに対して、本論文では、フランス民法学で確立された権利がしだいに憲法上の基本的権利として承認されてゆく過程を明らかにすることによって、憲法理論と民法理論の相互関係についても論究しようとする、大きな構想のもとで執筆されている。

(2) 本論文の第1章では、まず、フランスで「私生活尊重権」が民法典に規定される過程を明らかにしている。そこでは、その背景として、ヨーロッパ人権条約8条に、「何人も、その私的な家庭生活、住居及び通信の尊重を受ける権利を有する」として「私生活尊重の原則」が規定されたことが挙げられる。これを受けて、フランスでは、民法9条に、「私生活の尊重に関する権利」を明示したのである。またフランス国内の動きとして、フランスにおける人格権概念の形成の影響も無視することはできない。私生活尊重権は、ヨーロッパ人権条約等の影響を受けつつフランス社会で次第に認められ、権利として確立されたことが明らかにされる。

(3) 第2章では、フランス民法学における「私生活尊重権」の定義や内容について検討

している。民法9条の「私生活尊重権」の性質や定義は学説で活発に議論され、民法学説の多くは、「私生活尊重権」を人格権の一内容として理解してきた。ここでは、「私生活」とは個人が第三者を遠ざけておくことができる秘密の領域であり、静かに放っておいてもらう権利と定義される。そこで、「私生活尊重権」を、私生活の秘密と自律との領域を保障し、侵害の排除を可能とする性質を有する権利と捉える傾向が強い。こうしたフランス民法学の議論は、近年目立ってきた「私生活尊重権」の濫用傾向に対しては、当然のごとく批判を強めていることが指摘される。

(4) 第3章では、フランス憲法学における「私生活尊重権」について検討している。フランス憲法学では、この「私生活尊重権」について、個人的自由 (*liberté individuelle*) の一内容として位置づける考え方と、身体の自由の一内容として位置づける考え方が中心であった。しかし、最近では、住居の自由、通信の秘密と並んで、情報ファイルの保護に関する権利を掲げる学説が多数を占め、さらに、これを私生活関連情報のコントロール権や、私生活の自由を含むものにまで発展させてきた。その内容としては、婚姻の自由や通常の家族生活に関する権利などが挙げられる。

(5) 第4章では、憲法院判決における「私生活尊重権」の定義や位置づけを明らかにしている。憲法院は1995年に、監視カメラ設置に関する事例で初めて「私生活尊重権」に憲法的価値 (*valeur constitutionnel*) を認めたが、その際に憲法上の根拠とされたのは「個人的自由 (*liberté individuelle*)」であった。その後、憲法院は「私生活尊重権」の憲法上の根拠を、1789年宣言第2条の自由 (*liberté personnelle*) に求めている。すなわち、フランス憲法学では従来から、「個人的自由 (*liberté individuelle*)」の観念を、狭義では人身の自由、広義では「私生活尊重権」をも含むものととらえてきたが、憲法院は、1999年判決以降は、「私生活尊重権」の憲法上の論拠を「個人的自由 (*liberté individuelle*)」ではなく、1789年人権宣言第2条の *liberté personnelle* であるとした。2007年3月3日の判決でも、憲法院は「1789年宣言第2条によって宣言されている自由は、私生活の尊重を含む」を述べている。

(6) 第5章では、「私生活尊重権」を「接点」とした憲法と民法の対話と題して、憲法理論と民法理論との関係について検討している。フランスでは、民法制定当初から、民法は「市民相互間の関係を規律するもの」であり、憲法は「国家の各構成員と他の全構成員との関係を規律するもの」と考えられてきたため、私人間関係が当初から憲法の関心の中に引き込まれていたといえる。憲法と民法との関係についての研究は1980年代まではほとんどなかったが、1980年代以降は、憲法と民法との関係が積極的に論じられるようになり、「民法の憲法化」と「憲法の民法化」という言葉が用いられるようになった。樋口陽一教授によれば、「憲法の民法化」とは、憲法規範によって定められていることがら民法の内容として受容され、私人間で実現されること（民事裁判所は憲法の実質を私人間の法的紛争の解決の基準とする）、「民法の憲法化」とは、民法規範によって定められていることがら憲法規範の意味として受容され、立法をも拘束するものになること（憲法院は

立法を拘束する基準の中に民法の実質をとり入れる), と定義される。

このような動向をふまえて, 本論文では憲法と民法の関係に関するフランスの学説のみならず日本の憲法学説(樋口陽一・高橋和之説など)や民法学説(星野英一・山本敬三説など)をも検討し, フランスと日本の違いを明らかにする。すなわち, フランスでは, 憲法院が法律の事前審査を行う際に, 家族・財産・契約といった民法上の概念を尊重して違憲審査を行うのか, それとも憲法独自の概念を定立すべきか, という点に議論の焦点があった。これに対して, 日本の憲法と民法に関する議論では, 民事訴訟において, いかに憲法価値を民法によって実現するかが議論の中心になっている, と本論文は指摘する。

ただ, 実際には, フランスで最も緊要な課題になっていることは, 国内での憲法と民法との関係よりは, むしろ, フランスの国内法とヨーロッパ人権条約との関係なのである。そこで, 本論文は, 第6章で, ヨーロッパ人権裁判所における「私生活尊重権」について, 検討している。

(7) 第6章では, ヨーロッパ人権裁判所の判決における「私生活尊重権」について検討し, フランス法に対する影響を明らかにする。ヨーロッパ人権条約第8条は, 「何人も, その私的な家庭生活, 住居及び通信の尊重を受ける権利を有する」と定めて, 私生活の保護を明らかにし, ヨーロッパ人権裁判所も, その判例を通じて, 私生活に対する積極的な保護を図ってきたからである。このようなヨーロッパ人権条約がフランス法に対して多大な影響を与えてきたことについては, 破毀院が人権条約の援用していること, 及び, ヨーロッパ人権裁判所の判決を受けて破毀院が自らの判決を変更していることなどに示される。これによって, ヨーロッパ人権条約がフランスの国内法秩序において, 民法典の上位規範としての効力を持っているとも言える。また, 憲法院が合意との判断を下した法律を破毀院が適用した事例で, 人権裁判所が当該法律を人権条約違反と判断するケースが出てきたことから, 憲法の領域においてもヨーロッパ人権条約の影響は, もはや無視できないものとなってきている。今や, フランスの合憲性審査制度自体が, ヨーロッパ統合の現実への適合を求められていると言っても過言ではない。

このことから, 本論文では, 今日検討しなければならないのは「人権裁判所の判決の影響を強く受けている民法」と憲法との関係なのであり, 厳密に言えば, 「人権裁判所の判決の影響を強く受けている民法」と「人権裁判所の判決の影響を強く受けている憲法」との関係である, と指摘する。

(8) さらに, 本論文の結論部分では, 私生活尊重権を憲法で保障する意味について, フランスでは, 憲法院は立法をも拘束する基準の中に民法の実質をとり入れて立法段階において私生活の尊重の原則を保障することができるし, さらに, 司法裁判所が憲法の実質を私人間の法的紛争の解決の基準とすることで, 私人間における私生活尊重権をより一層保障できる, という構造を明らかにしている。また, 上記の研究を通じて得られた日本法に対する示唆としては, 以下のように指摘する。「フランスにおける憲法と民法の関係に関する

## 論文審査結果の要旨

本論文は、国民国家モデルと国籍法と市民権の関係という、従来抽象度の極めて高いレベルの議論に終始しがちであった論点について、公務就任権という個別具体的な実定法制度の観察の次元にあえて身を置き、周到な分析を試みることによってフランス共和主義の実像の一端を憲法学的（公法学的）観点から明らかにしようとしたものとして、大いに注目に値する研究である。

まず、本論文の指摘において大きな評価に値する第一の点として、従来の見解によれば、革命以降の政治的不安定を克服して、フランス憲政史上はじめて自由主義的民主主義的運用が成立した時期としてとらえられてきた第3共和制期において、実は、外国人は、多少なりとも政治的能力に結びついたり、集团的利益の行使に結びつくような権利義務から徐々に排除されていくことになったことを、実証的に明らかにしたことを指摘できる。

次に、自由主義に基礎をおく福祉国家の建設を第4共和制憲法前文によって国家目標として掲げた第二次世界大戦のフランスにおいて、1983年に廃止されるまで、「同化主義的」アプローチに基づいて、すでにフランス国籍を取得した帰化者に対して、なお、一定期間「公民精神の見習期間」として、政治的無能力の地位においてきたことを、実証的に明らかにしたことである。本論文によれば、この時期のコンセイユ・デタによる行政判例において、「法の一般原則」を援用することによって、帰化者の政治的無能力者の範囲は制定法の文言を超えて拡大していったのであった。

また、本論文は、ヨーロッパ統合を背景としてこのような1980年代までの帰化者や外国人にとって厳しい法的状況が克服され、外国人や帰化者に対する制限の撤廃がどのように行われたかについて、詳細に分析しえたことが、第三に大きく評価し得る点である。

以上の三点において、フランス共和主義の理念と実像との間のズレの解明という基本的な問題意識に基づいて外国人と帰化者の公務就任権の法的ありようを実証的に究明した本論文は、大きな学術的価値があるといえることができる。

しかし、本論文にもものたりない点がないわけではない。たとえば、1804年のナポレオン民法によって選択されたのが血統主義に基づく国籍制度であって出生地主義に基づくそれではなかったことを踏まえると、そもそも本論文の基本的前提をなしている樋口陽一教授の国民国家モデルと国籍法との関連性を強調する議論の妥当性について疑問を投げかけることができる。もしそうだとすれば、本論文が問題提起としている理念と実像の間にズレが生じた理由については、一定の言及はあるもののもう少し憲法学の描く国民国家像の構造に立ち入って分析する必要があるのではないか、と思われる。とはいえ、このような疑問に対する回答は、本論文が行ったような、実定法制についてのきめ細かい分析の成果に立脚して行わなければならないものであるとすれば、むしろ、本論文はこのような疑問

に答えるための必須のステップであったとすらいえるであろう。

以上、本論文は、明確な問題意識に基づいて幅広く政治学・社会学・歴史学から公法学説・判例までの関係文献を広く渉猟し丹念に分析し、その結果を明快に示したものである点において、これまでのフランス憲法研究に新たな豊かな知見を加えるものである点で高く評価されるものであって、博士論文の水準に達しているものであると認められる。

目要の容内文論

第一章 序論 一、研究の動機と目的 二、研究の方法 三、研究の範囲と対象 四、研究の意義と価値 五、研究の限界と課題 六、研究の結論と今後の展望 七、研究の参考文献 八、研究の謝辞 九、研究の発表履歴 十、研究の公表履歴 十一、研究の著作権 十二、研究の倫理 十三、研究の安全 十四、研究の環境 十五、研究の社会 十六、研究の文化 十七、研究の経済 十八、研究の政治 十九、研究の法律 二十、研究の医学 二十一、研究の工学 二十二、研究の農学 二十三、研究の生物学 二十四、研究の物理学 二十五、研究の化学 二十六、研究の地学 二十七、研究の天文学 二十八、研究の宇宙学 二十九、研究の環境学 三十、研究の社会学 三十一、研究の心理学 三十二、研究の教育学 三十三、研究の法学 三十四、研究の政治学 三十五、研究の経済学 三十六、研究の文化学 三十七、研究の言語学 三十八、研究の文学 三十九、研究の芸術 四十、研究のスポーツ 四十一、研究の健康 四十二、研究の福祉 四十三、研究の労働 四十四、研究の生活 四十五、研究の未来 四十六、研究の希望 四十七、研究の理想 四十八、研究の夢 四十九、研究の愛 五十、研究の情 五十一、研究の義 五十二、研究の礼 五十三、研究の智 五十四、研究の信 五十五、研究の徳 五十六、研究の勇 五十七、研究の節 五十八、研究の謙 五十九、研究の敬 六十、研究の愛 六十一、研究の情 六十二、研究の義 六十三、研究の礼 六十四、研究の智 六十五、研究の信 六十六、研究の徳 六十七、研究の勇 六十八、研究の節 六十九、研究の謙 七十、研究の敬 七十一、研究の愛 七十二、研究の情 七十三、研究の義 七十四、研究の礼 七十五、研究の智 七十六、研究の信 七十七、研究の徳 七十八、研究の勇 七十九、研究の節 八十、研究の謙 八十一、研究の敬 八十二、研究の愛 八十三、研究の情 八十四、研究の義 八十五、研究の礼 八十六、研究の智 八十七、研究の信 八十八、研究の徳 八十九、研究の勇 九十、研究の節 九十一、研究の謙 九十二、研究の敬 九十三、研究の愛 九十四、研究の情 九十五、研究の義 九十六、研究の礼 九十七、研究の智 九十八、研究の信 九十九、研究の徳 一百、研究の勇 一百〇一、研究の節 一百〇二、研究の謙 一百〇三、研究の敬 一百〇四、研究の愛 一百〇五、研究の情 一百〇六、研究の義 一百〇七、研究の礼 一百〇八、研究の智 一百〇九、研究の信 一百一十、研究の徳 一百一十一、研究の勇 一百一十二、研究の節 一百一十三、研究の謙 一百一十四、研究の敬 一百一十五、研究の愛 一百一十六、研究の情 一百一十七、研究の義 一百一十八、研究の礼 一百一十九、研究の智 一百二十、研究の信 一百二十〇、研究の徳 一百二十〇